

科目名	文化情報論特講	担当者	ホサカ トシコ 保坂 敏子	期間	通年	単位数	4
-----	---------	-----	------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>文化情報専攻での研究活動を行う際に必要なリテラシーの涵養を目的とする。具体的には、テキストを対象とする文化研究、言語と文化の教育・学習活動を対象とする言語教育研究の基盤となる文化観の様相の理解、ならびに、研究方法や研究倫理に関する基本的な知識や認識の獲得を目指す。本講義において2つのコースの領域横断的な資質・能力を学修し、特別研究において領域固有の資質・能力を身に付ける。</p> <p>以上の目的を達成することにより、論理的・批判的思考能力をはじめ、倫理観、問題発見・解決力、コミュニケーション能力、省察力を身に付けることを目指す。</p> <p>【日本大学教育憲章ルーブリック：A-1:3, A-2:3, A-3:3, A-4:3, A-5:3, A-6:3, A-7:3, A-8:3】</p>		
到達目標	<p>【一般目標 (G10)】</p> <p>文化情報分野において研究・論文作成をするのに必要な資質・能力を修得する。</p> <p>【行動目標 (SB0s)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化研究、および、言語教育研究の基盤となる文化観・文化の捉え方の様相について説明できる。 ある文化の捉え方について、別の文化観と比較できる。 「文化翻訳：文化の往還と変容」という文化観を理解し、具体的な事例が説明できる。 修士論文の作成に必要な先行研究・情報の収集方法や研究倫理、それぞれの分野の研究の進め方について理解し、自律的に論文作成に適用できる。 学術的な用語を正確に使い、剽窃を避けて注や引用などを適切に行うことができる。 		
学修方略 (方法)	<p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】</p> <ul style="list-style-type: none"> manaba folio を利用して、インタラクティブな個別指導と受講者同士の協働学習を行う。 オープンエデュケーション教材 (OER) や対面講義について、質疑応答やワークショップを行う。 <p>【学修方略 (LS)】</p> <p><通信授業 (在宅学習)></p> <ul style="list-style-type: none"> 前期は基本教材1の(1)を熟読、後期は基本教材1の(2)を視聴し、参考図書等を参照して、レポート課題1を作成する。(自習・自主研究・レポート作成) レポート作成後は、manaba folio を使って、教師の個別添削指導を受け、改訂したレポートのピア・レスポンスを行い、その結果を踏まえて改訂したものを最終稿とする。(ディベート、レポート作成) <p><スクーリング (集中面接授業) 2単位分：基本教材2></p> <ul style="list-style-type: none"> 7月中旬に3日間実施されるスクーリング (集中面接授業) に全日程出席する (単位取得要件) (ディベート)。なお、補講を実施する場合がある。 スクーリング後、指定された期限までにレポート課題をmanaba folio に提出する。(レポート作成) <p>【学修時間】</p> <p>在宅学修では、レポート課題1につき、完成までに以下を目安に最低45時間の学修時間を要するものとする；1)教材の学修；20時間、2)レポート執筆；10時間、3)レポート推敲と最終稿の完成 (教員の添削指導、ピア・レスポンスを含む)；15時間。</p>		
スケジュール	<p>本講義は大学院の初年度教育に相当するので、初年度に履修すること。</p> <p><通信授業 (在宅学習) 2単位分：基本教材1></p> <ul style="list-style-type: none"> 前期：レポート課題1 締切：6月末 (初稿)・前期締切日 (最終稿) 後期：レポート課題2 締切：10月末 (初稿)・後期締切日 (最終稿) <p><スクーリング 2単位分> 2019年7月13日～15日 (9月中旬に補講を実施する場合がある)</p> <p>1) 研究、及び論文作成に必要なリテラシー (担当：専攻主任)</p> <p>①研究・論文作成の概論 ②研究、及び論文作成に求められるもの ③論証あるいは検証の方法 ④研究倫理1 ⑤研究倫理2 ⑥先行研究のレビューとその利用方法 ⑦研究及び論文の進め方</p> <p>2) 文化情報専攻分野における様々な課題 (担当：各科目担当教員)</p> <p>⑧文学研究I ⑨文学研究II ⑩文学研究III、⑪「文化翻訳」 ⑫社会言語学</p> <p>⑬言語教育研究I ⑭言語教育研究II ⑮言語教育研究III</p> <ul style="list-style-type: none"> スクーリング・レポート課題1：スクーリング1週間後 (初稿のみ) スクーリング・レポート課題2：スクーリング終了の1か月後 (初稿のみ) 		
成績評価	種別	割合	評価基準
	通信授業 (在宅学習)	50 %	<p>レポート40% (学術論文作成のスキル、課題に応じた内容)</p> <p>観察記録10% (指摘への対応、期限遵守、ピアラーニング)</p> <ul style="list-style-type: none"> 最終期限に提出されなかった場合、評価外とする (0点)。 草稿を一度も出さず、提出期限間際に提出した場合は、そのレポート課題の評価点はC以下となる。
	スクーリング	50 %	<p>レポート40%：課題1 10%、課題2 30% (論旨、構成、独創性、論文作成スキル)</p> <p>観察記録10% (取り組み、討論、発表、期限遵守) 10%</p>
履修者への要望	<ul style="list-style-type: none"> 通信授業 (在宅学習) のレポートは、初稿から最終稿にいたるまで、教師のフィードバックによる書き直し、ピア・レスポンスによる推敲、最終稿の完成と段階的に進める。 ピア・レスポンスは、それぞれのレポートへの個別指導が終わり次第始める。 レポートでは、引用のルールや参考文献の明示、制限文字数 (参考文献、注を除いたもの) を遵守すること。無断引用等、研究倫理上の重大な問題があった場合は、評価の対象外となる。 		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	<p>(1) 著者名： 佐藤慎司・熊谷由理編 教材名： 『異文化コミュニケーション能力を問うー超文化コミュニケーション能力をめざして』（ココ出版、2013） ISBN: 978-4-904595-46-6 3,600円＋税</p> <p>(2) 著者名： 秋草俊一郎, 井上健, 古賀太, 呉川, 椎名正博, Dorsey, John T., 保坂敏子, 松岡直美 教材名： JMOOC教材『文化翻訳入門ー日本と世界の文化コミュニケーションー』（講義映像：後期開始時に配信。一部スクーリングの際に配信する）</p> <p>教材(1)は言語教育(日本語・国語・英語)に携わる研究者が「異文化間コミュニケーション能力」の概念について再考したものである。「文化」「コミュニケーション」「能力」の概念の歴史の変遷と問題点を明らかにし、「超文化コミュニケーション能力」という新たな視点を示している。 教材(2)は2017年1月11日～2月7日に開講したJMOOC講座『文化翻訳入門ー日本と世界の文化コミュニケーションー』（総合社会情報研究科制作）の講義映像と配布資料である。比較文化、文学、言語教育の研究者が、「文化翻訳」をキーワードに、文化の翻訳・翻案・変容の事例を取り上げ、解説する。</p>
参考図書	<p>(1) 西山教行・細川英雄・大木充編 『異文化間教育とは何かーグローバル人材育成のために』（くろしお出版、2015） ISBN-13: 978-4874246733 2,400円＋税</p> <p>(2) 渡辺 靖 『〈文化〉を捉え直すーカルチュラル・セキュリティの発想（岩波新書）』（岩波書店、2015） ISBN-13: 978-4004315735 842円（税込）</p> <p>(3) 『国際シンポジウム「文化翻訳が拓く異文化間コミュニケーション」報告書』（2016年2月22日開催 総合社会情報研究科主催 非売品 後期開始時にpdfで配布）</p>
履修上のポイント	<p>第三の文化や個の文化の提唱など、文化の捉え方が問い直されている。それぞれの研究領域における文化の捉え方をクリティカルに検討していただきたい。 また、レポート作成過程でのピア・ラーニングを通じて考察を深めていただきたい。</p>
レポート課題 1	<p>基本教材1-(1)で第1部述べられている「文化」「コミュニケーション」「能力」の概念の変遷を整理した上で、第2部の実践研究の一つを取り上げて要約し、その実践における「文化」の捉え方、扱い方について他の文化観と比べながら自分の考えを論じる。(本文のみ3000字～4000字) 留意点： 参考図書(1)(2)も参照しながら、要点を分かりやすくまとめて、論考すること。 引用のルールに気を付けながら、事実と意見、自分の意見と他人の意見を区別して書くこと。</p>
レポート課題 2	<p>基本教材1-(2)を視聴し、一つの講義、あるいは、一人のテーマを選んで要約し、その講義での「文化翻訳」という考え方について説明する。それを踏まえて、具体的な「文化翻訳」の例(作品例、授業実践例)をとりあげて、「文化翻訳」の様相を記述し、なぜそれが「文化翻訳」と言えるのか具体的に論じる。(本文のみ3000字～4000字) 留意点： 取り上げた講義の「文化翻訳」の捉え方について、ポイントをわかりやすくまとめる。</p>

基本教材 2	
教材の概要	<p>著者名： 秋草俊一郎, 井上健, 古賀太, 呉川, 椎名正博, Dorsey, John T., 保坂敏子, 松岡直美 教材名： JMOOC教材『文化翻訳入門ー日本と世界の文化コミュニケーションー』（講義映像、配布資料(関連論文)：スクーリング開講前に提示・配布します)</p> <p>2018年1月11日～2月7日に開講したJMOOC講座『文化翻訳入門ー日本と世界の文化コミュニケーションー』（総合社会情報研究科制作）の講義映像と配布資料である。比較文化、文学、言語教育の研究者が、「文化翻訳」をキーワードに、文化の翻訳・翻案・変容の事例を取り上げ、解説する。</p>
参考図書	<p>佐藤望編著 『アカデミック・スキルズ(第2版)ー大学生のための知的技法 入門』（慶應義塾大学出版会、2012） ISBN-13: 978-4766419603 1,080円（税込）</p>
履修上のポイント	<p>スクーリング前半においては、①研究及び論文の最低条件を理解し、②研究を進めるための基本的なスキルを身に付けるとともに、③研究及び論文作成のモチベーションを高めることを目指す。後半においては、各分野に共通する基礎的な課題を学際的に考察して、研究基盤となる知識・教養の習得に努める。いずれにおいても、事前の準備と講義中の発言及び質問など積極的な姿勢がポイントとなる。</p>
レポート課題 1	<p>スクーリングの合同講義と専攻別講義の概要をまとめ、自分の意見を論じる。(1000字～1500字)</p>
レポート課題 2	<p>各分野の研究手法の講義や参考図書、スクーリングでの発表と討論を踏まえて、研究計画書をまとめて、指導教員のレビューを受けた上で提出する。(3000字～4000字)</p>